

組合員数107,087人  
支部数 943  
読者数 66,346人  
(5日現在)  
(連絡先) ☎03(5978)2751 FAX03(5978)2777  
E-mail/honbu@nenkinsha-u.org  
ホームページ/年金者組合と入力し検索して下さい。



第392号 2022年8月15日(月)  
(通巻第591号)

全日本年金者組合中央本部

〒170-0005東京都豊島区南大塚1-60-20天翔大塚駅前ビル  
発行人 杉澤 隆宣 月刊1部100円(組合費を含む)  
昭和57年6月30日第三種郵便物認可



展示された首里城地下の司令部壕模型(長さ5m、100分の1縮尺) 二昨年12月、沖縄県庁で求める会提供

# 軍隊は 沖縄戦 この痛恨の事実 住民を守らない

## 軍人以上に民間人が死んだ

ロシアのウクライナ侵略の影響もあり「防衛力強化」賛成が、6割を超えるといわれる現在の日本。沖縄戦を指揮した牛島満第32軍司令官の孫である牛島貞満さん(68・元教員)は平和授業や講演で「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓を生かし、意見の違い、国の争いは「戦争(武力)ではなく、人間の知恵(対話)で解決すること」だと語ってきました。改憲が声高に叫ばれる今こそ「憲法9条を実現していくことが大切」と語ります。



牛島貞満さん

### 首里城地下の司令部壕 保存・公開求め運動中

牛島さんは講演活動と共に、首里城地下にある「第32軍首里城司令部壕の保存・公開・活用」の運動に取り組み、本も出版しました。「国内最大、最後の地上戦を指揮した司令部壕は重要な戦争遺跡です。年金者組合の皆さんの保存・公開を求める会への参加、支援金協力をお願いします」と、牛島さんは訴えています。(連絡先は0800・64099・153336。メール32shuri@gmail.com)

## 憲法9条こそ平和の道 語り伝える牛島貞満さん

「沖縄戦を指揮した牛島司令官の孫に首里司令部壕で「南部 端の摩文仁に追い詰められ、撤退」を決定しました。南部に避難した沖縄県民の犠牲は一切考慮されし」と最後の命令を出し、6月22日に牛島司令官、長参謀長は自決しました。この命令に従って、残存の日本軍は住民を巻き込んで9月2日まで戦闘を続け、住民の死者(10万8863人)が軍人の死者(7万9273人)を上回るといふ悲惨な結果を生みました。

「この事実をどう見るか。日米の戦力が違ったので、では軍人以上に民間人が死んだことの説明にならない。ウクライナの事態を見て、防衛が必要と思う現代人と、中国戦線から送られてきた軍を大歓迎した当時の沖縄の人たちの意識に、近いものを感じます。軍隊がいれば、住民は守られず、逆に命がおびやかされたのが沖縄戦でした。『悠久の大義ではなく命どう宝』の考えを広げていかなければ」と牛島さんは語ります。さらに、「沖縄戦の遠因は、朝鮮半島、中国大陸、東南アジアへの侵略戦争にあったという歴史をふまえて東アジアの平和・共存を構築する外交努力」が大切であると言葉が強めます。

## 東京に初の九条の碑

東京・足立区 千住九条の会が建立



東京・足立区の「千住九条の会」は、2020年1月に伊藤千尋氏の講演会を開催し、国内外に「九条の碑」が幾つもあることを知りました。講演会にお招きいただいた、同年11月3日に「九条の碑を建立する会」を結成しました。その後、募金活動、宣伝活動を行い翌年7月に記者会見を行い、8社の新聞紙上に掲載され、800人近い個人団体の皆様より激励と募金をお寄せいただき完成されました。

▲完成を祝う千住九条の会のみなさん。中央の球体がステンレス製の碑で、9条の条文が彫り込んである

6月19日に除幕式と完成のつどいを開催し173人の皆さんが参加しました。「九条の会」事務局長の小森陽一さん、伊藤千尋さんの挨拶、建築家や、土地を提供してくださった医療法人財団健和会理事長、地元代表のスピーチや音楽も交え、「今こそ九条を高く掲げよう」と気持ちを一つにしました。

ロシアによるウクライナ侵略を口実に「軍事には軍事を」が叫ばれるなか、「九条」による平和外交が求められます。多くの皆さんに見に来てもらいたいと思います。「九条の碑」を建立する会 中田順子

## 風雪

▼上皇と同年同月生まれ  
の孝雄さんは昭和19年、母が3歳の妹だけを連れて再婚、「お前は自分で生きていきなさい」と農家に置いていかれた。戦時中のことを聞かれると「病気の母を置いて空襲で逃げ回った」と話を作った。

▼十代のころ、勝征さんは殴ってばかりの義父を殺してやろうと思っていた。義父は南方から帰郷したが、妻は戦死公報を受けて弟と再婚していた。やむなく上京、3人の子を抱えた勝征さんの母と再婚した。「事情を知って気の毒と思ったが、恨みは消えぬ」勝征さんの思いだ。

▼康子さんの母は毎朝仏壇に「満州」からの逃避行で亡くした姉の名を呼び「ごめんね」と謝っていた。認知症になった母は康子さんを「幸子」と姉の名で呼ぶようになった。康子さんは「母から姉の悲しい思いは消えたが妹の私も消えてしまった」と複雑な表情だ。

▽戦争の傷は人の心から消えなご。